

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02038

研究課題名(和文) 近世都市の人口と家族 - 飛騨高山の宗門改帳を史料として -

研究課題名(英文) Urban population and family in early modern Japan: A case of Takayama

研究代表者

岡田 あおい (Okada, Aoi)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：50246005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終的な目標は、近世都市の人口と家族を歴史人口学の手法を用いて解明することである。飛騨高山には約100年間に及ぶ宗門改帳が残存する。この史料は、慶應義塾大学名誉教授故速水融先生がマイクロフィルム化され、この史料を使って千葉大学名誉教授故佐々木陽一郎先生が研究をおこなった。

本研究では、デジタル化された飛騨高山の宗門改帳から基礎シート(BDS)を作成するという、基本的な作業をおこなった。基礎シートは、残存期間が最も長期に及ぶ式之町の宗門改帳から作成を開始した。研究期間内に基礎シートの作成は安永2(1773)年より天明7(1787)年まで終了した。この間の世帯数は延べ1400件に及ぶ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史人口学では、近世都市の人口に大きな関心を向けてきた。しかし、そもそも史料が乏しいうえに、史料の残存期間が短く、また欠年も多いために、静態人口および動態人口の数量的分析を十分に行えているとは言い難い。また、近世都市では人的移動とともに、世帯の移動も激しいと言われているが、近世都市の家族(世帯)の研究は、歴史人口学の一つの大きな研究領域であると思われるが、本格的な研究はまだ手付かずの状態である。近世都市飛騨高山の家族(世帯)の研究は、歴史人口学と家族社会学の学際的研究をさらに進展させることが可能な、また新たな研究領域を創造させるものである。

研究成果の概要(英文)：The final goal of the present research is to clarify the population and families of the early modern city by using the methods of historical demography. There has been little research into the historical demography of the early modern city. However, shumon aratame cho (SAC, "religious inquisition registry books") for over approximately 100 years have been maintained in Hidatakayama. These valuable historical records were converted to microfilm by the late Professor Emeritus Akira Hayami of Keio University. Then, the late Professor Emeritus Yoichiro Sasaki of Chiba University analyzed this SAC. In the present research the plan is to perform the basic work of creating basic data sheets (BDS) from digitized SAC of Hidatakayama. Now we are creating basic data sheets (BDS) by using the SAC of Ninomachimura, which among these historical records have been preserved for the longest time.

研究分野：家族社会学

キーワード：人口 家族 世帯 飛騨高山 宗門改帳 基礎シート 近世 都市

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、近世都市飛騨高山の歴史人口学と家族社会学の学際的研究を行うことが目的である。我が国の歴史人口学は、1960年代に誕生した比較的新しい学問である。宗門改帳を主な史料とし、ここから基礎シート(BDS)を作成し、これをデータベース化し、静態人口および動態人口の数量的分析をおこなう。これまで、歴史人口学は精力的に研究を進めてきたが、多くは農村の史料を用いた研究である。その理由は、残存期間が長期に及ぶ良質な宗門改帳は、農村に保存されているケースが多いためである。しかし、歴史人口学は、当初より近世都市の人口に大きな関心を向けてきた。大坂(菊屋町) 奈良(東向北町) 京都(四條立売中之町・西堂町・花車町・志水町など) 長崎(桶屋町) 在郷町郡山上町、秩父大宮郷、そして本研究で用いることになる飛騨高山といった都市の人口研究を積極的に行ってきたと言えるだろう。長崎桶屋町、郡山(在郷町郡山上町)、そして飛騨高山を除き都市の宗門改帳は残存期間が短く、また欠年も多い。近世都市の人口変動の重要性を認識し、工夫を凝らしながら、研究は進められ、農村の研究と比較すれば量的には少ないが、研究成果もそれなりに蓄積されている。

近世都市の歴史人口学的研究の主なテーマは、都市-農村間の人口調整メカニズム(都市蟻地獄説・都市墓場説)であり、研究の中心は人口指標の分析にある(友部謙一:1999)。速水融は、西条村の宗門改帳の分析から奉公などによる都市生活経験者の死亡率の高さに言及し、近世の都市は農村から人口を引き寄せては殺してしまう蟻地獄であるという都市蟻地獄説(E.A.リグリーの都市墓場説も同様の内容)を唱えた(速水融・他:1971)。この蟻地獄説は、佐々木陽一郎により飛騨高山の宗門改帳を史料とする近世都市の研究から支持された(佐々木陽一郎:1977)。しかし、斎藤修は都市蟻地獄説の再検討を提起し、友部謙一は長崎桶屋町の分析から「農村にくらべ都市における『高い死亡率・低い出生率』という図式は描ききれない」と指摘した(斎藤修:1989、友部:1999)。また、在郷町郡山上町の人口指標を分析した高橋美由紀は「在郷町では妥当しない場合も多い」と述べている(高橋美由紀:2005:11)。この都市蟻地獄説に対して、A.シャーリンは修正仮説を提示し、都市住民の階層による人口再生産構造の違いを提示し、都市蟻地獄説は、流動層にはあてはまるが、定住層にはあてはまらないと主張している(Sharlin:1978)。このA.シャーリンの修正仮説を踏まえ、斎藤修は、「雑業者化仮説」を唱え、労働市場の構造の違いが江戸と大坂の結婚と出生行動の違いをもたらしていると主張している(斎藤修:1987)。

このように、近世都市の研究では、いくつかの仮説が提示され、活発に議論されているが、そもそも史料が乏しいうえに、史料の残存期間が短く、また欠年も多いため、静態人口および動態人口の数量的分析を十分に行えているとは言い難い。また、近世都市では人的移動とともに、世帯の移動も激しいと言われているが、高橋の在郷町郡山上町の家族形態の分析、浜野潔の京都の宗門改帳を史料とした世帯構成の分析などしか、近世都市の家族(世帯)に関する研究は見られない。都市の家族(世帯)の構造は農村の家族構造と異なるのか。異なるとすれば、どのように異なるのか。近世都市の家族(世帯)の研究は、歴史人口学の一つの大きな研究テーマであると思われるが、本格的な家族(世帯)の研究はまだ手付かずの状態である。

## 2. 研究の目的

本研究は、近世都市飛騨高山の歴史人口学と家族社会学の学際的研究を行うことが目的である。数少ない近世都市の歴史人口学的研究の中心は人口指標の分析であり、本格的な家族(世帯)の分析は見られない。近世都市の人口移動は農村に比べ激しく、引っ越しが多かったといわれているが、長期間残存する史料を用いた研究は現時点では存在しない。果たして、近世都市では引っ越し(世帯の移動)が多かったのだろうか。階層による違いはあったのだろうか。また、都市の家族(世帯)構造は農村の家族(世帯)構造と異なるのだろうか。異なるとすればどのような特徴があるのか。近世都市の家族(世帯)の定住率とその構造の特徴を解明すること、これが、本研究の最終的な目的である。この研究が完成すれば、歴史人口学の都市研究を進展させることが可能であり、家族社会学の世帯構造研究にも新たな地平を切り拓くことになる。

本研究では、近世都市飛騨高山の宗門改帳を史料とする。近世都市の歴史人口学的研究は、史料の乏しさを原因とし、研究の進展が阻まれている。しかし、飛騨高山の宗門改帳は、残存期間が長期に及ぶばかりでなく、情報が豊富である。飛騨高山式之町村の宗門改帳は残存期間が99年(1773年~1871年)にわたり、欠年がない。現在発見されている近世都市の人口・家族史料の中でこの史料は最良の史料と言えるだろう。すでにこの史料は1960年代に慶應義塾大学名誉教授故速水融によってマイクロフィルム化されている。その数は71巻(1巻に1000枚収録)に及ぶ。この貴重な史料は千葉大学名誉教授故佐々木陽一郎により研究が進められてきた。氏は、この膨大な史料から基礎シート(BDS)と個人シートを作成し、拡張フォートランでプログラムをコーディングし、千葉大学に設置された大型コンピュータを用いてデータを分析した。氏の急逝に伴い、申請者の研究室に氏が作成された基礎シートが移された。この資料を整理、データベース化し、近世都市人口・家族の研究を完成させることが本研究期間の当初の目的であった。しかし、資料の確認作業中に基礎シートに不備が発見され、計画を変更せざるを得なくなった。歴史人口学の研究にとって、基礎シートは、その名の通り研究の重要な基礎をなす資料であり、こ

の基礎シートに不備があれば研究そのものの信頼性が失われることになる。基礎シート作成は、膨大な時間とマンパワーを必要とする作業であり、研究の 8 割はこの作業に費やされると言っても過言ではない。当初の研究目的を変更し、急遽デジタル化した史料（68914 コマ）を紙焼きする作業から開始し、新たに基礎シートを作成することが本研究期間の新たな目的となった。なお、佐々木陽一郎氏は、基礎シートを作成されたが、このシートを分析に用いていない。氏は、宗門改帳に登場する人物について個人カード(40290 人分)を作成し、大型コンピュータを用いてデータを処理し、人口指標について分析し、研究成果を発表している(佐々木陽一郎:1969、2001)。したがって、基礎シートの不備は、氏の分析および研究成果には直接関係はなく、氏の分析および研究の信頼性が失われることはない。

### 3. 研究の方法

デジタル化された近世都市高山の宗門改帳を紙焼きし、基礎シートを作成し、これを基にデータベースを作成し、データ分析を行い、近世都市の研究を完成させることが本研究の最終目標である。しかし、この研究を達成するには、史料が膨大であるために長期計画を立てなければならない。研究段階を数段階に分けて研究を進める。まず、第一段階としてデジタル化した史料を紙焼きし、これを基にして基礎シートを作成する。基礎シートが完成した段階で、第二段階のデータベース構築作業を開始する。データベース作成には、すでに申請者が構築済みのフォーマットを利用する。数回のデータクリーニングを経てデータベースが完成した段階で、第三段階の分析作業、具体的には基本的な人口指標、家族指標について分析を開始する。この分析結果は、これまで歴史人口学で論争となってきた近世都市の人口調整メカニズムを再検討することにつながる。とともに、近世都市の家族（世帯）の特徴が解明されることになる。

最終段階は歴史人口学、家族社会学の研究者数名とプロジェクトを立ち上げ、「近世都市の人口と家族」の本格的な研究をおこなう。このプロジェクトはこれまで研究者が個別に研究を進めてきた近世都市の研究を一挙にまとめ総合的に、また比較の視点を取り入れて都市研究を展開させる。本研究はこのように大きなプロジェクトを組織し、歴史人口学と家族社会学の学際的研究を進展させることが可能な、また新たな研究領域を創造させるものである。

本研究期間は、この研究の第一段階である。デジタル化された飛騨高山の宗門改帳を紙焼き（68914 コマ）し、基礎シートを作成した。飛騨高山の史料は膨大であり、基礎シートの作成を効率よく行うことを心がけたが、本研究期間中の完成には至らなかった。

### 4. 研究成果

本研究期間は、主にデジタル化された宗門改帳および紙焼き（68914 コマ）から基礎シートを作成した。先行研究も存在するので、それらを参照しながら、基礎シートを作成する中で得た知見をまとめる。

#### (1) 近世都市飛騨高山の概略

飛騨高山では天正 14（1586）年金森長近が入封し、築城とともに城下町経営が始まった。町人町は、宮川右岸の低地帯に、宮川の流れに沿って南北に東から西へ、一番町・二番町・三番町が作られた。金森氏転封後、侍町は町人町となり、また町人町も市域が南北に拡大した。元禄 5 年高山藩領はすべて幕府領となる。元禄 7(1694) 年幕命で大垣藩が実施した検地によると町場は壱之町村、弐之町村、参之町村からなり、それぞれに村高が付けられた町と村が未分離の状況である。壱之町村は、元禄検地の時、壱之町・欠之上町・鉄砲町・島川原町・日影町・若達町・天照寺町・宗猷寺町・壱之新町・八幡町からなっていた。壱之町は、城山の北麓、宮川と江名子川に挟まれた平坦地のほぼ中央部に位置し、南北 6 町 29 間の細い町域である。東西に横切る安川通によって二分されていて、南半分を上町、北半分を下町といった。壱之町は当初より町人町として成立し、商家が軒を並べているが、有力商人の多くが酒造業を営んでいた。なかでも金森氏時代に町代を勤め、幕府領下で町年寄となった矢島家、大坂屋吉右衛門がこの町に属する。弐之町村は、元禄 8(1695) 年の屋舗検地帳によれば、弐之町・弐之新町・下新町からなり、三町合わせて屋敷 5 町 4 反余、分米 49 石余とある。壱之町の西に接する弐之町は、金森長近が城下町経営にあたって造った三筋の町人町のうち二番町が弐之町となった。元禄 7(1694) 年の検地によれば屋敷 3 町 7 反余、分米 37 石 8 斗余、屋敷持 193、家数 222 であった。弐之町は金森氏の城下経営の当初より町人町として成立し多くの商家がある。飛騨第一の豪商と言われた大坂屋七左衛門はこの弐之町で商いを営んでいた。弐之町の西に位置する参之町村は、金森氏時代の三番町に由来する。元禄 8(1695) 年の屋舗検地帳によれば、参之町・片原町・上川原町・西川原町・八軒町・中川原町・川原町・東川原町・向町・下向町からなる。この 10 村合わせて屋敷 7 町 9 反余、分米 72 石余りである。参之町村に属する参之町は、屋敷 3 町 7 反余、分米 37 石 9 斗余、屋敷持 218、家数 233 である。町人の町として発展した参之町には豪商も少なくなかった(平凡社地方資料センター編：1989)。

壱之町村・弐之町村・参之町村はいくつかの組に分かれている。各組には 5 人組頭とは異なる町組頭が一人いる。組数は一定ではなく、享保 9(1724) 年 4 月には、壱之町村 10 組、弐之町村 15 組、参之町村 12 組であった。天保 5(1834) 年には、壱之町村 9 組、弐之町組 9 組、参之町村

12組である（高山市：1981：303）。

（2）史料の残存期間および性格

近世都市飛騨高山には、壺之町村、弐之町村、三之町村の宗門人別帳が残っている。各村は、それぞれいくつかの組に分かれていて、宗門改帳はこの組を単位として作成され、村単位で保存されている。それぞれの宗門改帳の残存期間は以下のとおりである。

『飛騨国高山壺之町村宗門人別帳』（表書は一定ではなく異なる場合もあるが、本報告書ではこの名称に統一する。弐之町村、参之町村の宗門改帳の名称も同様である）の残存期間は、文政2（1819）年より、明治4（1871）年までの53年分が欠年無く連続して残っている。

『飛騨国高山弐之町村宗門人別帳』は享保3（1718）年、4（1719）年、そして安永2（1773）年からは明治4（1871）年までの99年分が連続して残っている。『高山市史 上巻』によると、この弐之町村の宗門改帳は、90余りの袋に入っている（高山市：1981：293）。

『飛騨国高山参之町村宗門人別帳』については、寛政5（1793）年、文化2（1805）年、文化10（1813）年、文化15（1818）年、文政10（1827）年、文政12（1829）年、明治4（1871）年の宗門人別帳が残存している。この3村以外にも、『飛騨国高山山寺内町村宗門人別帳』の文政2（1819）年、文政5（1821）年、文政8（1824）年、文政11（1827）年、天保2（1831）年、天保4（1833）年、天保6（1835）年、天保8（1837）年、天保12（1841）年、天保15年（1844）年、弘化2（1845）年、弘化5（1848）年、嘉永4（1851）年、嘉永8（1855）年、安政4（1857）年、安政7（1860）年、文久2（1862）年、元治2（1865）年、慶應4（1868）年分がマイクロフィルムには撮影されている。

宗門改帳は、組ごと（表1参照）に作成されており、その形式、書き方はほぼ一定である。宗門改帳には、一筆ごとに宗旨、旦那寺、持高、家持・借家、名前、続柄、年齢、移動記載、人数、家請人記載が記載されている。また、帳末には、帳末人数（宗派別に人数が記載されている年もある）、村高が記載されている。

町名	組名
東川原町	村田屋惣兵衛組
	四瀧屋孫兵衛組
	林屋利兵衛組
	林屋利兵衛預り組
	林屋兵右衛門組
西川原町	中村屋治助組
中川原町	中村屋治助組
弐之新町	谷屋九兵衛組
	米屋治兵衛組
弐之町村	浅野屋臺右衛門組
	高桑屋与右衛門組
	高桑屋与右衛門預り組
	和泉屋勘兵衛組
	福嶋屋五右衛門組
下新町	直井屋七兵衛組
上川原町	松田屋吉右衛門組
町年寄	川上屋

（3）史料観察

基礎シートは、残存期間が最も長期に及びしかも欠年の無い、弐之町村の宗門改帳から作成を開始した。基礎シートの作成は天明7（1787）年まで終えた（2020年3月現在）。この間の世帯数は延べ1400件に及ぶ。

弐之町村の宗門改帳の安永2（1773）年から天明7（1787）年までの帳末に記載された人数をまとめた（表2）。ただし、帳末に記載された人数、家数等は宗門改帳に一筆ごとに記載されている人数をたし合わせた数、男女別人数をたし合わせた数、あるいは家数と一致しない場合があるが、ここでは帳末に書かれている人数等を記載されている通りに記述している。

年	竈数	人数	内男	内女	内山伏	備考
1773年	安永2年	617	2217	1125	1090	2註(1)
1774年	安永3年	739	2672	1361	1306	5
1775年	安永4年	742	2691	1372	1313	6註(2)
1776年	安永5年	719	2573	1307	1260	6註(3)
1777年	安永6年	380	1940	989	946	5註(4)
1778年	安永7年					註(5)
1779年	安永8年	205	2008	1159	1022	74
1780年	安永9年	667	2660	1365	1290	5
1781年	安永10年	721	2705	1384	1315	6
1782年	天明2年	695	2513	1275	1231	7註(6)
1783年	天明3年	402	2258	1169	1085	4註(7)
1784年	天明4年	590	2661	1371	1299	6
1785年	天明5年	715	2616	1348	1260	8
1786年	天明6年	470	2379	1200	1173	6註(8)
1787年	天明7年	453	1723	854	861	8註(9)

註(1) 上川原町(松田屋吉右衛門組) 帳末史料なし・町年寄(川上屋) 帳末史料なし  
 註(2) 町年寄(川上屋) 帳末史料なし  
 註(3) 東川原町(四瀧屋孫兵衛組) 帳末史料なし・町年寄(川上屋) 帳末史料なし  
 註(4) 東川原町(村田屋惣兵衛組) 帳末史料なし・下新町(直井屋七兵衛組) 帳末史料なし  
 註(5) 宗派別史料のみ・組別史料なし  
 註(6) 弐之新町(米屋治兵衛組) 史料欠年  
 註(7) 東川原町(村田屋惣兵衛組)、東川原町(林屋兵右衛門組) 浄土宗人数なし・弐之町村(和泉屋勘兵衛組) 真、禅、法花宗人数なし  
 註(8) 東川原町(村田屋惣兵衛組) 浄土宗人数なし・下新町(直井屋七兵衛組) 浄土宗の竈数なし  
 註(9) 東川原町(村田屋惣兵衛組・林屋兵右衛門組)、下新町(直井屋七兵衛組)、上川原町(松田屋吉右衛門組) 浄土宗人数なし

<引用文献>

速水融・内田宣子、1971、「近世農民の行動追跡調査」『研究紀要』徳川林政史研究所。

- 速水融、1990、「近世都市の歴史人口学的観察 - 奈良東向北町 寛政5年 - 明治5」年『三田学会雑誌』82巻特別号。
- 平凡社地方資料センター編、1989、『日本歴史地名体系 21 岐阜県の地名』平凡社。
- 鬼頭宏、1985、「近世後期地方都市の人口再生産力：秩父大宮郷の場合」『上智大学経済学部七十周年記念論文集』。
- 斎藤修、1989、「都市蟻地獄説の再検討 - 西欧の場合と日本の事例」速水融・他編『徳川社会からの展望 発展・構造・国際関係』同文館。
- 斎藤修、1987、『商家の世界・裏店の世界 江戸と大阪の比較都市史』リポレポート。
- 佐々木陽一郎、1969、「飛騨国高山の人口研究 - 人口推移と自然的要因 - 」社会経済史学会編『経済史における人口』慶應通信。
- 佐々木陽一郎、2001、「歴史人口学とコンピュータ」『千葉大学経済研究』第16巻1号。
- 高橋美由紀、2005、『在郷町の歴史人口学 - 近世における地域と地方都市の発展 - 』ミネルヴァ書房。
- 高山市編、1981、『高山市史 上巻』。
- Allan Sharlin, 1978, "Natural decrease in early modern cities: a reconsideration" Past and Present 79.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 盛永審一郎 松島哲久 小出泰士 浅野幸治 浅見昇吾 池辺寧 石田安実 今井尚生 大谷卓史 岡田あおい 他25名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 326
3. 書名 いまを生きるための倫理学	

1. 著者名 安藤究 井口高志 石井クンツ昌子 和泉広恵 岡田あおい 釜野さおり 木戸功 工藤豪 阪井裕一郎 嶋崎尚子 清水洋行 千田有紀 田淵六郎 田間泰子 千年よしみ 筒井淳也 藤間公太 永井暁子 米村千代 西野理子 他13名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 183
3. 書名 よくわかる家族社会学	

1. 著者名 中澤港 林玲子 高橋重郷 津谷典子 鈴木透 原俊彦 石井太 黒須里美 和田光平 吉田良生 井上孝 安蔵伸治 稲葉寿 金子隆一 小池司朗 新田目夏実 岡田あおい 他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 832
3. 書名 人口学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------